

北海道熊研究会 会報 第 126 号 2024 年 5 月 5 日

【創刊 2013 年 1 月 25 日】

北海道熊研究会事務局 北海道野生動物研究所

代表 門崎 允昭

事務局長 Peter Nichols ピーターニコルス氏

幹事長 藤田 弘志 氏

Tel 011-892-1057

ご意見やご連絡は、次の email へお願い致します  
( [kadosaki@pop21.odn.ne.jp](mailto:kadosaki@pop21.odn.ne.jp) )

- 会報の 1~125 号以前の号は Website に「北海道野生動物研究所」と入力し、ご覧下さい。  
「北海道熊研究会」の Facebook と Twitter の編集は横山敬子氏が当たります  
Facebook : <https://www.facebook.com/HokkaidoBearResearchAssociation>
- 「北海道熊研究会」Hokkaido Bear Research Association の活動目的  
熊の実像について調査研究し、それを啓発する事です。

私 (門崎允昭) の**熊に関する基本姿勢**は人的経済的被害を予防しつつ、極力熊は殺すべきでないという立場です。

**理由** : この**大地は全ての生き物の共有物**であり、生物間での食物連鎖の宿命と疾病原因生物以外については、この地球上に生を受けたものは生有る限り互いの存在を容認しようと言う生物倫理(生物の一員として、他種生物に対して、人が為すべき正しき道に基づく理念による。

**2023 年には道内で 7 件の熊に依る人身事故が発生しています。その個々の概要をお**

## 知らせします。

熊が人を襲う原因は、食害②排除③戯れの、3項目です。

**事件①** 2月4日午前9時半頃：函館市大船町の山林で、前田政春さん69歳が襲われて、腕や足に怪我をした（道新2月5日版）。門崎の見解；穴熊が人の接近に驚いて、穴から飛び出て襲って来たものである。冬籠もり穴を保持するために、

人を排除するために襲ったもの。

**事件②** 4月1日午前9時頃：厚岸町太田4の道で、千葉遥さん37歳が中型犬2匹を連れ、散歩中に、出て来た熊に、後頭部を噛まれ（？門崎）、右足を引っ搔かれたと言う。自分で携帯電話で、救助を求めたと言う。不慮の遭遇に不快感から人を排除するために襲ったもの。

**事件③** 5月14に道北の朱鞠内湖の湖岸に、釣りに来

ていた西川俊宏さん 54 歳が、熊に襲われ殺され、身体が多くを食べられたと言う事象である。熊は西川さんを襲って、直ぐに身体を食害している事から、最初から、食べる目的に襲ったものである。

私は鉈を持って居て、反撃していれば、殺されずに生還し得た事象と見ている。

襲った熊は道のヒグマ対策室主幹の武田忠義さんに依ると、体長 162cm、体重は推定 120kg、歯の年輪検査で 3 歳の雄、手足の最大横幅は 14.5cm だと言う。遺体は 15 日に収容し、加害熊も付近で、同時に銃殺したと言う。原因は喰う為に襲ったものである。

④ 6 月 28 日午後 5 時頃；羅白町の知床岬の先端部で、男性 4 人で鹿猟中の、40 代の猟師が、熊に襲われ左腕に 2 針縫う傷を受けたと言う。ガススプレを噴射したら、熊は逃げたと言う。

門崎の意見；熊は本気で襲ったものではない。ガススプレの噴射は熊が逃げて行く、発端になったものと、門崎は見る。しかし、**ガススプレは熊が本気で襲って来た場合には、無力**

である事を知るべきである。

⑤ 10月13日16時半頃、阿寒町在住の高橋和寿さん52

歳が阿寒町シュンクシタカラ湖で、釣りをし終えて、自転車で往路である林道を走行中に、カーブになった林道を曲がろうとした先80m程に母子熊（母熊は体長1.2m程、子は体長50cm程であった）がいるのを目撃した。母子は高橋さんに気づかずに母熊が先頭になり、その後ろを子熊がついて、氏に近づいて来た。そこで、母子熊は高橋さんに気づいたが、子熊が停止せずになおも高橋さんに接近して来た。その途端、母熊が猛スピードで、氏に接近して来たので、熊撃退スプレーを、2.5m程の距離で発射したが、襲われ、熊に噛みつかれ、爪で引っ搔掛かれつつ、もがいたら、熊から身体が離れた。

それ以上母熊は、襲って来なかった。それから、やっとの

事で、浄水場に辿りつき、職員に事の次第を伝えた。右肩は骨が飛び出し。右目失明の重傷であった。

母熊は子を保護するために、先制攻撃したものである。

⑥ 10月29日に、渡島管内の大千軒岳に登山に入った、北大生の屋名池奏人ヤツカトさん 22歳が、熊に襲われ殺させ、  
身体を喰われていた。

熊が襲った原因は、食う為である。理由は、襲って、直ぐに人体を喰いだしたと、推察される事による。

鉈で応戦していれば、殺されずに生還し得た可能性があった事件である。

⑦ ⑥と同じ渡島管内の大千軒岳に、10月31日に登山に入った渡島管内の消防署員（3人の勤務地は異なる）が熊が襲って来たので、山菜採り用の小刀で、熊に反撃、小刀が熊

の喉元に刺さった。熊は襲うのを止め、逃げたと言う。

この個体は⑥の個体である。餌を保持し続ける為に、襲って来たものである。

「山菜採り用の小刀」を、携帯していた事で、熊を撃退し得たのである。結局、この熊は、後日⑥の遺体付近で、死んだ状態で発見された。

なお、この件では、ホイッスルと刃物を携帯していたと言う事で、見習うべき事象である。

## (1) 熊の生息地に入域しての事故対策；

熊との遭遇を避けるために「ホイッスル」を携帯する。鈴、ラジオは風や流水が強いを聞こえない故、不適。

(2) 鉈の携帯を推進する事。熊類は分類学で猛獣であり、人を襲い食う事がある故。

アイヌは熊対策として、両腰にタシロとマキリ（鉈）を携帯していた。熊は刃物で反撃され、己の身体に少しでも血が出るような傷を受けると、人を襲うのを止める特性がある。熊は人を襲う時、抱きついて襲うので、柄が長い刃物は不適である。銃器以外では、鉈が最適である。

## <熊対策として国が為すべき事>

自然地と人の生活圏との境界に、熊が人の生活圏に出て来ない様に、有刺鉄線柵を国策として、張りめぐらすべきである。

オーストラリアで、実施している。

(了)